

観光タイムマシーン

ちょっと時間を遡って、昔の観光に触れてみませんか。
意外と知られていない観光にまつわるトリビア(雑学・豆知識)をご紹介します。

【早駕籠】

江戸時代の代表的な乗り物である駕籠は、用途によってさまざまな種類がありました。中でもスピードを重視したのが「早駕籠」です。複数人で駕籠を担ぎ、現代の夜行バスのように目的地まで夜通し走り続けたそうです。その様子は歌舞伎の演目「忠臣蔵」にも描かれ、江戸から赤穂(兵庫県)までの約620kmの道のりをわずか4日半で移動したとされます。

参考:『日本大百科全書』/(一社)赤穂観光協会「赤穂観光」



【乗合馬車】

明治初期に誕生した乗り物で、不特定多数の客を乗せ決まったコースを運行して料金を徴収していました。現代の路線バスの起源といえる公共交通機関です。ちなみに、乗合馬車の海外での名称は「omnibus(オムニバス)」。ラテン語で「すべての人のために」を意味します。現代の街中に走る「バス」は、この言葉に由来しています。

参考:『世界大百科事典』



【立場】

江戸時代に宿場と宿場の間に設けられた、現代の「SA・PA」のような施設。旅人が杖を立ててひと休みしたことが名前の由来とされています。「立場茶屋」と呼ばれる茶屋では土地の名物が用意され、旅人たちの憩いの場となりました。

参考:国土交通省 関東地方整備局「東海道について」

【足元を見る】

江戸時代の旅は徒歩が基本でしたが、場合によっては、「現代の「観光タクシー」にあたる駕籠に乗って移動することもありました。その料金は1里400文(約4km、1万円)。その際、駕籠を担ぐ「駕籠かき」は旅人の歩き方を見て、疲れていそうな人には高い料金を要求することもあったそうです。これが、相手の弱点を見つけて付け込む「足元を見る」の語源になったともいわれています。

参考:『故事ことわざ辞典』(日本史小百科交通)

【旅行用心集】

1810年に刊行された旅の心得をまとめた本で、現代でいう旅行ガイドブックのようなもの。旅での注意事項や必需品などが紹介され、当時の旅人たちの必需品でした。「宿に着いたら火事や盗難に備えて裏口を確認しておくべき」「食べ過ぎに注意し、空腹時の飲酒や入浴は慎むべき」といった、現代の旅行でも役立つような教えも多く記されています。

参考:『日本史小百科 宿場』

【おかげ犬】

江戸時代、伊勢神宮へ集団で参詣する「おかげ参り」が流行。伊勢参詣を口実に旅に出て、その道中に各地を観光することが一般的でした。そんな中、病気で旅に出られない人が、代わりに愛犬を参詣させたのが「おかげ犬」です。「伊勢参りに行く」と書かれた紙と現金が入った風呂敷を首に巻いた犬は、道行く人々に世話をされながら参詣し、主人の元へ無事に帰ってきたといわれています。

参考:『天の伊勢参り』(埼玉県の日本史) 湯山・江戸時代の庶民の旅①「ブリタニカ国際大百科事典」

